

新刊紹介

奥田邦男氏著

Accental Systems in the Japanese Dialects

— A Generative Approach —

「日本語方言アクセントの生成音韻論的研究」

奥田邦男氏は長年アメリカで研究し、Ph. D.を取得して帰国された方である。本書は最近の生成文法理論に基づいて書かれたものであり、従来の伝統的な音声表示による分析方法ではなく、基底アクセント表示を追求することによって、各方言の関連性、歴史的变化を明確にしておられる。

本書は従来のアクセント解釈を批判し、生成音韻理論による奥田氏独自のアクセント解釈をわれわれに提出したという、たいへん意義深いものである。

本書は氏がカリフォルニア大学に提出した博士論文に修正を加えたものである。書物やテープによるデータを中心にして書かれた博士論文に、さらに本書で、氏が帰国してから各地方を回られて、改めてデータを確かなものにして書かれたものである。

本論は5章から成り立っている。

第1章 The Accentual System of the Narada Dialectでは、言語的に孤立した村であると考えられている奈良田方言について述べられている。その主な議論として、奈良田方言はアクセント基底表示及び音韻規則が、根本的には近隣の方言（たとえば東京方言）と同じであり、表層アクセントの相異はピッチ顕示規則によるものだと述べておられる。ピッチ顕示規則とは以下のものである。

a、低ピッチ付加

$\% \times \% \rightarrow \text{低}_1$

b、高ピッチ付加 (Rank%)

低 \rightarrow 高 / $\left\{ \begin{array}{l} [+acc] \text{ ---} \\ \% \text{ --- 低} X \end{array} \right\} \left(\begin{array}{l} \text{I} \\ \text{II} \end{array} \right)$ (Xに高が含まれている場合は随意的)

c、ピッチ調整

高 \rightarrow 低 / 高 \rightarrow 高

ただし、「高」は高ピッチモーラ、「低」は低ピッチモーラ、「低₁」は低ピッチが1モーラ以上続くことをさす。

これらの規則をniwatori「にわとり」、tebukuro「手袋」、kabutoga「兜が」、Pinaganaku「犬が鳴く」に適用すると次のようになる。

基底表示 ピッチ顕示規則 音声表示

$\% \text{ niwatori} \% \quad \rightarrow (a, \text{bii}) \quad \rightarrow \overline{\text{ni}} \text{watori}$

$\% \text{ tebu}^{\text{~}} \text{kuro} \% \quad \rightarrow (a, \text{bi}, \text{bii}) \quad \rightarrow \overline{\text{te}} \text{bu} \text{ku} \text{ro}$

$\% \text{ ka}^{\text{~}} \text{buto} \& \text{ ga} \% \quad \rightarrow (a, \text{bi}) \quad \rightarrow \overline{\text{ka}} \text{bu} \text{to-ga}$

$\% \text{ ?inu}^{\text{~}} \& \text{ ga} \% \text{ naku} \% \rightarrow (a, \text{bi}, \text{bii}, \text{c}) \rightarrow \overline{\text{?i}} \text{nu-ga} \text{naku}$

%は小文節境界で、&は形態素境界である。

第2章 The Accentual System of the Matsue Dialect では、松江方言の語彙表示とアクセント交替を議論されている。広島方言と比較することによって基底表示を見出し、松江方言に適用される色々な規則について述べておられる。さらにこの章では、松江、広島、その他の方言の古代日本語からの変化を述べ、2モーラ名詞には従来考えられて来た5つのアクセント型に対して8つの型を、3モーラには7つではなく11のアクセント型を、(←つぎのページにつづく)

原始日本語のアクセント型として再構可能であると述べておられる。それは従来の2モーラの5つの型、○○、○¹○、○○¹、○¹○、○¹○¹に○○¹、¹○○、¹○¹○を、3モーラの8つの型、○○○、○○¹○、○○○¹、○¹○○、○○¹○、○¹○○、○¹○¹○に○○○¹、¹○○○、¹○¹○○をを加えたものであり、○○¹と○○○¹がまだ証明されていないとしても、可能なこれらの型を提出なされたのはたいへん興味深く、将来大いに議論される課題となるであろう。

第3章 *Accental System in the Dialect of Suzu and Toyama* では、珠洲、富山という疑似京阪式アクセント方言について述べられている。この章では、これら2つの方言に対するピッチ顕示規則を提案することにより、表層表示が共時的語彙表示から派生され、通時的規則によって共時的語彙表示が古代日本語のアクセント表示から派生され得ると述べておられる。これらの方言の古代日本語からのアクセントの変化を記述する歴史上の諸規則が提出されている。

第4章 *Accent Placement in Sino-Japanese Nouns* では、余剰規則とアクセント配置規則による漢語 (Sino-Japanese) のアクセント配置について述べておられる。有標 (markedness) の概念を用いることにより、名詞の正しい音声表示が、語彙にアクセント情報を指定せずに派生できることを示しておられる。奥田氏の書かれた規則の一部を紹介し、規則を適用した一例を掲げよう。

余剰規則

(I) [*u Tonic*] → [+Tonic]

(II) [-Tonic] → [-Oxytonic]

(III) [*u Oxytonic*] → $\left\{ \begin{array}{l} [+Oxytonic] / \text{in monosyllables} \\ [-Oxytonic] / \text{in dissyllables} \end{array} \right\}$ (a)
(b)

アクセント配置規則

(I) $\left[\begin{array}{l} +\text{Tonic} \\ +\text{Oxytonic} \end{array} \right] \rightarrow [+acc] / \# \text{ CV(C)(V) _____\#}$

(II) $\left[\begin{array}{l} +\text{Tonic} \\ -\text{Oxytonic} \end{array} \right] \rightarrow [+acc] / \# \text{ CV _____\ CV \#}$

上の規則を適用した例として、

[*u Tonic, u Oxytonic*] → [+Tonic, +Oxytonic]

CV¹: *ka*¹ 'section', *si*¹ 'city', *go*¹ 'word', *bi*¹ 'beauty',...

CV¹V: *he*¹*i* 'soldier', *yo*¹*o* 'business', *ze*¹*i* 'tax', *ka*¹*i* 'meeting',...

CV¹N: *ki*¹*n* 'gold', *bu*¹*n* 'sentence', *se*¹*n* 'line', *ke*¹*n* 'sword',...

[*u Tonic, u Oxytonic*] → [+Tonic, -Oxytonic]

CV¹CV: *ri*¹*tu* 'rate', *si*¹*ki* 'ceremony', *ka*¹*ku* 'nucleus',

*si*¹*tu* 'quality', ...

(←つぎのページにつづく)

[*m* Tonic, *u* Oxytonic] → [–Tonic, –Oxytonic]

CV: *zu* ‘chart’, *ro* ‘furnace’, *sa* ‘difference’,...

CVV: *hoo* ‘law’, *hyoo* ‘list’, *boo* ‘pole’,...

CVN: *ban* ‘evening’, *zen* ‘Zen’, *zyun* ‘order’,...

CVCV: *riku* ‘land’, *satu* ‘bill’, *syoku* ‘job’,...

[*u* Tonic, *m* Oxytonic] → [+Tonic, +Oxytonic]

CVCV¹: *doku*¹ ‘poison’, *netu*¹ ‘heat’, *yoku*¹ ‘desire’,...

第5章 Accent Placement in Compound Nounsでは、東京方言の複合名詞のアクセント、京都方言に関する問題を議論し、さらに広島方言の複合名詞のアクセントに対する余剰規則とアクセント配置規則を正当づけておられる。色々な学者の複合名詞アクセント規則を紹介し、批判しながら、氏独自の規則を提出しておられる。複合名詞の最後の要素が、3モーラ以上の場合と2モーラ以下の場合のアクセント規則の違いを論じ、複合名詞のアクセント配置に後部要素がどのように影響しているかを見い出し、組織づけ、正当づけるのはたいへんなことであるのだが、氏は本書で明確に述べておられる。その洞察力に全く感服いたすところである。

最後の Appendices には、広島方言の形態素の色々な型（前アクセント型、無核型、尾高型、頭高型）をまとめ、形態素付加による複合名詞の有核、無核、さらに、複合名詞のアクセント形成をくわしく54ページにもわたってまとめておられ、広島方言を研究する者にとっては広島のアセント特徴を知る上での貴重な資料となる。

最後に、本書は従来の考え方を検討、批判し、新しい生成音部理論でアクセントを究明した非常に示唆深いものである。

(昭和50年3月20日、文化評論出版刊、A5判320ページ、3500円)

(広島女学院大学 小林泰秀)